



震度7の巨大地震がまちを襲った場合の被害想定

参考：「御前崎市地域防災計画」

想定最大津波	19m
死者数 / 津波に対する早期避難ができた場合 ／ 早期避難ができなかった場合	約 1,000 人 約 2,100 人
重傷者数	約 1,200 人
全壊および焼失家屋	約 7,100 棟
半壊家屋	約 3,700 棟

震度7の巨大地震を体験した人が伝える「大事な備え」

INTERVIEW



宮城県栗原市危機対策課
高橋 秀一 課長

市内は大混乱に陥った

これまでに体験したことの無い非常に強い揺れで、市役所では天井が落ち、柱や壁が大きく崩れました。市内は家屋倒壊や道路の寸断、1週間に及ぶ停電で大混乱でした。そのような状況だったので、懐中電灯や防寒器具は不可欠。また、スーパーやコンビニには食材が入ってこなかったため、非常食の備蓄は重要だと痛感しました。

東日本大震災は平日昼間に発生したため、在宅者には高齢の人が多く、行政だけで対応できない部分もありました。そこで重要だったのが自助・近助・共助です。近助とは、向こう三軒両隣の、近くの関係での助け合い。自主防災組織を中心に、自身や地域の安全を守る行動をとることが肝心です。

INTERVIEW



熊本県益城町危機管理課
奥村 敬介 主事

その場にとどまれない

死が頭をよぎりました。柱などが車のワイパーのように動き、床に伏せても今自分がいる位置にとどまることすら厳しい状況でした。特に2回目の本震では、深く絶望したことを覚えています。町内の約1万棟の住家のうち3,000棟が全壊、98%が一部損壊以上の被害で、地域によっては見渡す限りがれきの山でした。過去に大きな地震が発生したことがなく、旧耐震性基準で建てられた家が多かったことも原因の一つです。また、町では風水害対策をメインにしており、地震対策は一般的なものとどまっていた。

御前崎市の皆さんには、家具固定の重要性を認識し、防災対策を実施していただきたいと思います。

防災アンケートによる市民の防災対策の状況

- ・家具を固定している…49% (H28)
- ・食料や飲料水を3日間以上備蓄している…40% (H29)
- ・災害用伝言ダイヤル「171」を知っている…62% (H28)
- ・家族で避難する場所を決めている…49% (H29)

参考：大産業まつりにおいて実施した防災アンケート(平成28,29年度分)

家庭での防災対策が叫ばれていますが、市内で家具を固定している家庭はまだ約半数。地震が発生したら、半数の家庭は家具で負傷したり、逃げ遅れたりする可能性があります。3日間以上の備蓄をしている家庭は40%。食料は発災後すぐに手に入るとは限りません。また、家庭で連絡方法や避難場所を決めておかないと、家族の安否もわからず、一人で避難生活を送ることにもなります。



市危機管理課
山崎 雅樹 課長

約3万3千人に対し369人。1人当たり約90人を守らなくてはならない計算です。支援する側も被災します。ライフラインも寸断されるため、市内各所で発生する被害全てに対応することは不可能です。

自助のために、まずは身の回りの安全を確認しましょう。

▼家具の転倒防止対策を実施。

▼最低3日分の食糧と水、衣類や生活用品を入れた非常持ち出し袋を用意。

▼家族が別々の場所で被災する場合は考え、連絡方法や連絡先、待ち合わせ場所を決める。

▼避難経路は昼間と夜間、実際に歩いて確認。防災マップや被害想定で地域の危険箇所を確認。

市では防災マップのほか、弁護士会ニュース、被災者支援チェックリストなども配布しています。災害発生時に受けられる支援についても知っていたら、家族で災害に備えてほしいです。

市には、防災に関する補助金制度があります。ぜひ家庭の防災対策に活用してください。